ＫＯＢＥの本棚

－神戸ふるさと文庫だより－

第 99 号　令和３年（2021年）11月20日

編集・発行　**神戸市立中央図書館**

〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1

TEL：(078)371-3351　FAX：(078)371-5046

神戸文化ホール　「あじさい」の壁画とエントランス

神戸文化ホール

ＪＲ神戸駅から北へ、湊川神社、「みどりと彫刻の道」を通り、中央体育館まで上がると、高村智恵子の紙絵「あじさい」の壁画が美しい神戸文化ホールが見えてきます。

大倉山に大規模なホールを含む公会堂を建設する計画は大正時代にさかのぼり、大正十一年～十二年と昭和十年の二度、設計競技（コンペ）が開かれました。後者のコンペ後、建設予定地の大倉山公園の一部に整地工事が施されましたが、経済情勢の悪化や、社会情勢の変化により計画が頓挫。整地された場所は現在、野球場として使用されています。

公会堂設立の夢は、昭和四十八年に神戸文化ホールとして結実しました。装置や楽器などの搬入出、観客の動線がスムーズで、演者・観客双方に使いやすいホールです。ここに楽しい思い出を持つ人も多いのではないでしょうか。

今年は四年に一度の神戸国際フルートコンクール開催年です。新型コロナウイルスの影響で第一次審査まではオンラインで行われましたが、来年三月の本選は、この文化ホールで行われる予定です。未来の巨匠の名演を期待したいと思います。

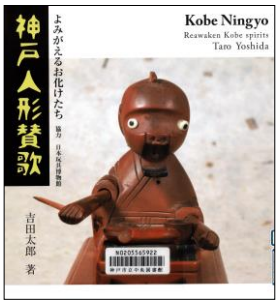
参考：『神戸市史紀要「神戸の歴史」』第二十七号ほか

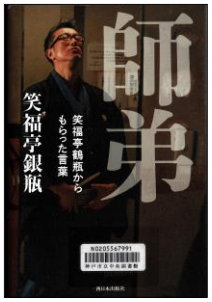
── 新しく入った本 ──

神戸人形賛歌―よみがえるお化けたち　吉田太郎（神戸新聞総合出版センター）

戦争と震災で二度姿を消しながらも、繰り返し復活を遂げてきた神戸人形。その姿を後世に伝えようと二〇一五年より制作・販売を始めた著者が、作品一つひとつの魅力を語る。人、猿、兎、鬼など、様々なモチーフが見せる豊かな表情が面白く、口を大きく開けて団子や西瓜（すいか）にかぶりつく姿や、宴会で唄い踊る様子は、見ていてどこか愛らしい。

神戸人形の歴史や、作者ごとの作品の特徴もまとめられており、読んだ後には、実際に動く姿を見てみたくなる。





師弟―笑福亭鶴瓶からもらった言葉　笑福亭銀瓶（西日本出版社）

神戸市生まれで在日コリアン三世の著者は、タレントになりたくて弟子入りした。しかし、落語聞き放題の修業生活や、神戸の落語文化に寄与した「もとまち寄席恋雅亭（れんがてい）」での裏方仕事、多くの噺家たちとの出会いを経て、真剣に落語と向き合っていく。「俺は今、お前を辞めさすつもりはない」「韓国語できるんか」といった師匠の言葉が織り込まれ、人情深い師匠の人柄や師弟関係のかけがえのなさが伝わってくる。

1950 HIROSHIMA 小磯良平幻のポスターの謎　笠岡めぐみ（しおまち書房）

「広島平和記念式典」の前身である「平和祭」は一九四七年に始まり、第四回のポスターは、神戸を代表する画家・小磯良平が手掛けたものだった。このポスターに描かれた街路樹のある緑の道や「LET'S BUILD FOR PEACE」の標語に込められた意味を紐解き、戦後間もない広島で活動した芸術家たちの存在と、平和記念都市の建設を支えた人々の想いを伝える。

美しい未来をつくるひとのための15のはなし　祇園景子（神戸大学出版会）

本書は神戸大学「未来世紀都市フェス」の講演から生まれた。経済学から見た災害復興のあり方、人の行動を導く天気予報など、日常生活からイメージしやすい内容に結び付けて、研究者や実務家が自らの研究とそこから見える未来を語る。二次元コードから講演映像も視聴でき、多くの知恵と最先端の知識から考える未来は、とても興味深い。読むと一緒に未来について考えてみたくなる。

開園70周年記念誌―タンタンと迎える70周年にありがとう（神戸市立王子動物園）

パンダのタンタンが暮らす王子動物園は、昭和二十六年に神戸博の跡地、原田の森に開園した。本誌では開園以来のあゆみを多くの図版で紹介すると共に、動物が暮らしやすく、来館者が観覧しやすい展示場づくりなど、研究や工夫から生まれた動物園の進化をたどっていく。五十周年記念誌以降の情報も豊富で、歴代の動物たちの写真や系図も掲載されている。

スマホで見る阪神淡路大震災―災害映像がつむぐ未来への教訓　木戸崇之　朝日放送テレビ（西日本出版社）

放送局は震災報道を通じて膨大な取材映像を残した。被災した街並み、被災者の声、生活再建に向かう歩みなど、映像は大震災の実状を伝える貴重なコンテンツである。本書は、各ページの二次元コードから当時の取材映像を観ることができ、映像だけでは伝え切れない部分を筆者が補足・解説する構成となっている。

地域や世代を超えて、今後の災害対策、防災教育に活かすことができるのではないだろうか。

―― 新しく入った本 ――

神戸レガッタ・アンド・アスレチック倶楽部１５０年史―日本スポーツ文化史とＫＲ＆ＡＣ（神戸リガッタ・アンド・アスレチック倶楽部）

神戸レガッタ・アンド・アスレチック倶楽部（ＫＲ＆ＡＣ）は、明治三年創設の神戸居留地外国人によるスポーツクラブである。

本書には、創設者Ａ・Ｃ・シムに始まる倶楽部の歴史、活動を支えた人々、野球・サッカー・ラグビー・ボートといった西洋発祥のスポーツが普及していく中で倶楽部が果たした役割が記されている。また、多くの自然災害に対して、倶楽部が行った救援活動も忘れてはならない。ＫＲ＆ＡＣのことを知るなら、まず手に取りたい一冊である。

鳴かずのカッコウ　手嶋龍一（小学館）

人員も少なく、逮捕権もなく、武器も持てない最小の情報機関である公安調査庁。その神戸事務所に勤める主人公・梶壮太は、中国資本による日本での不動産売買について調査する中で、手掛かりとなりそうなシップブローカーの会社を見つける。

元町にある漫画カフェ、住吉山手の住宅街、市営地下鉄など、神戸の街中を行き来しながら調査を進め、複雑な国際情勢に迫っていくスパイ小説である。

やさしい漱石　西村好子（不知火書房）

『文藝かうべ』の連載に、著者の過去の論文や紀行文を追加して一冊にまとめた。タイトルは、俳句から見出される漱石の優しい人柄と、本書の読みやすく易しい内容を掛け、漱石文学への扉となることを願って付けられた。

花や食など身近な題材にまつわるエピソードや、漱石研究ではあまり取り上げられることがなかった神戸・明石との関わりに触れている。

＝その他の新刊＝

神戸の風景―Best Selection 2010-2020　もふもふ堂（シーズ・プランニング）

古くて素敵なクラシック・レコードたち　村上春樹（文藝春秋）

老親友のナイショ文―往復書簡　瀬戸内寂聴　横尾忠則（朝日新聞出版）

神戸　その23　あんな人こんな人

河合　浩蔵　かわい・こうぞう

安政３年(1856)　～　昭和９年(1934)

河合浩蔵は、明治・大正期の建築家です。工部大学校造家学科（現東京大学建築学科）を卒業したのち、ドイツへ留学し、ベルリンで建築を学びます。帰国後、旧司法省庁舎の設計・監理を手がけると、大阪控訴院の設計依頼を受け、関西に移り住みます。続けて、神戸地方裁判所の設計に携わったのを機に、明治38年（1905）に神戸で建築事務所を開きました。

神戸を中心に活躍した河合は、みかどホテル（のちに鈴木商店本店となるが焼き打ちにあい、現存せず）や小寺家厩舎（きゅうしゃ）（相楽園内）、日濠館（現海岸ビルヂング）、川崎商船学校、神戸奥平野浄水場（のちの水の科学博物館）など、数多くの作品を残しました。また、神戸へ移るきっかけとなった神戸地方裁判所は河合のデザインを残しながら建て替えられており、当時の外壁を見ることができます。

昭和2年（1927）に建築事務所を閉じた後は、南画や骨董品の収集などの趣味を楽しんだと言われています。最後に自邸の設計を始めましたが、新邸の竣工を見ることなく世を去りました。

建て替える前の神戸地方裁判所

【参考】『関西の近代建築』石田潤一郎（中央公論美術出版，1996）、『神戸地方裁判所保存への道』（神戸の建築を考える会，1987）【画像】『京阪神ニ於ケル事業ト人物』（東京電報通信社，1919）、『近代建築畫譜 近畿篇』（近代建築畫譜刊行會，1936）

ランダム・ウォーク・イン・コウベ㊾

村上帝社と琵琶塚

山陽電鉄須磨駅から国道沿いを東に歩くと、赤い鳥居の横に「村上帝社　琵琶達人師長（もろなが）」と刻まれた石碑があり、奥に小さな社があります。

祀られているのは第六十二代村上天皇です。平安時代中期に位についたこの天皇は文学・和歌に通じ、琵琶の名手としても知られています。その治世は「天暦（てんりゃく）の治」と言われ、天皇親政の理想の政治が行われた聖代であるとされています。

「琵琶達人師長」とは、太政大臣まで昇り詰める一方で二度も配流の憂き目を見るなど波乱の生涯を送った平安時代後期の人物、藤原師長のことです。広く管弦や声楽に長じ、とくに箏と琵琶の名手でした。それまでの音楽を集大成するとともに独自の説を立て、後世に多大な影響を与えたと言われています。

村上帝社が建てられたこの地には村上天皇と藤原師長、二人の琵琶の名手にまつわる伝説がありました。それをもとに作られたのが謡曲「玄象（げんじょう）」です。

村上帝社　すぐ裏には山陽電鉄が走る

平安朝の末期、琵琶の名手であった太政大臣藤原師長は、さらに奥義を極めるために唐に渡ろうと考え、都を出て須磨の地にやってきます。

宿をとった汐汲みの老夫婦の家で、所望されて師長が琵琶を弾き始めると、にわかに雨が降り出して板の屋根を叩き、琵琶の音を妨げます。すると夫婦は板屋にむしろを敷いて、琵琶の音と雨音が和合するように調整しました。そのことに驚いた師長が二人に演奏を頼むと、老人は琵琶を、老女は琴をそれは見事に弾いたのです。自身の未熟を恥じて渡唐を思いとどまり都に帰ろうとした師長に、二人は自分たちが村上帝と梨壺の女御であり、師長の渡唐を思いとどまらせるために現れたのだと告げて姿を消します。

やがて若い姿の村上天皇が現れて、竜神に命じて海底に沈んでいた琵琶「獅子丸」を取り寄せ、師長に与えます。師長が受け取ってこれを弾くと、竜神たちと村上天皇も演奏に加わって秘曲を奏でます。琵琶の名器と奥義を伝授されて、師長は都へと帰っていきました。

もともとこの曲は「絃上」という名でしたが、観世流が近年「玄象」に改名しました。

「玄象」というのは琵琶の名器の名前で、村上天皇が所有していたとされています。平安時代末期の説話集『今昔物語集』の巻二十四「玄象琵琶鬼の為に取らるる語（こと）」は盗み取られた琵琶を鬼から返してもらった話で、「玄象」という琵琶は下手に弾かれると鳴らない、塵がついて拭き取らないと腹を立てて鳴らない、内裏が焼けた時には誰も取り出さなかったのにいつの間にか庭に出ていたなど、不思議な楽器であることが書かれています。

鎌倉時代に成立した『平家物語』巻七「青山之沙汰（せいざんのさた）」には第五十四代仁明（にんみょう）天皇の時代に藤原貞敏が唐から「玄象」「獅子丸」「青山」の三面の琵琶をもらい受けて帰朝しようとしたが、竜神が惜しんだのか海が荒れたので「獅子丸」を海に沈めて竜神に供え、あと二面の琵琶を都に持ち帰ったと書かれています。

琵琶塚の石碑

村上帝社のすぐ裏を走る山陽電鉄の線路の北側、須磨の浦地域福祉センターの庭先に「琵琶塚」と刻まれた大きな石碑があります。村上天皇が竜神から取り寄せて師長に与えた「獅子丸」が埋められていると言われています。かつて社と琵琶塚は同じ敷地内にありましたが、線路により二分されてしまったのです。

ここには昔前方後円墳があり、その形が琵琶に似ていたため、琵琶塚と名付けられたという説があります。琵琶にまつわる伝承が須磨の地に生まれたのは、この琵琶塚があったためなのかもしれません。

参考：『謡曲百五十番を歩く』『謡曲紀行　一』『神戸の遺跡と文学』『須磨の歴史』ほか

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

神戸市広報印刷物登録　令和3年度第120号-2
（広報印刷物規格　B-1類）